

# 大阪

あんなとこ  
こんなとこ

## 『八軒家浜船着場』

現在開催されている「水都大阪2009」の会場でもある八軒家浜船着場は、昨年新たに開港された船着場だと思っていました。しかし、その歴史の古い事を人づてに知り、不勉強挽回の意味も有り、八軒家浜について調べてみることにしました。

### 熊野街道

古代、この辺りは上町台地の先端で、河内潟と呼ばれた内海でした。その後、河内潟は、淀川と大和川の堆積などで河内湖から河内平野となりました。

平安時代は、「渡辺の津とも久品津あるいは窪津」とも呼ばれており、京の都から淀川を下って熊野御幸に出た上皇達はここ大川の渡辺の津（窪津）で船を降り、熊野に向かったと言います。熊野信仰が盛んになると頻繁に民衆も熊野へ参詣するようになり、熊野街道の起点であるこの場所は、多くの人でにぎわいました。

### 水運の要所

江戸時代になると、天満橋付近の大川南岸が八軒家浜船着場と呼ばれるようになり、京から淀川を下ってくる伏見船や三十石船など大小の船の発着地となり、大阪を代表する船着場のひとつとなりました。八軒家と言われるようになったのは、八軒の船宿が軒を並べていた事、川沿いに八軒の民家があった事、などが伝承され、幕府が許した定飛脚の官許株により、天神橋から天満橋の淀川沿いに八軒の飛脚問屋が軒を連ねていた事、が所以であるとされています。

八軒家浜船着場の当時の様子は、十返舎一九「東海道中膝栗毛」の弥次郎兵衛と北八が八軒家浜で下船し大坂での第一歩を踏んだくだりや、落語「三十石」などの話の中で当時の喧噪を伺い知る事ができます。また、撰津名所図会「八軒屋」、浪華百景「八軒屋夕景」には八軒家の賑わいが描かれているなど、多くの書物に遺されています。

伏見から八軒家までの船便は、明治の始めまで続いており、土佐堀通りにある「八軒家浜船着場の跡」が当時の面影を伝えます。現在、新たに整備された船着場は、「みち」と「かわ」を繋ぐ水の都大阪の再生拠点として、脚光を浴び始めています。



八軒家浜船着場の跡

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞